立教大學新聞

発行所
豊島区西池袋三丁目
立教大学新聞学会
振替東京 70852
電話(983)0111(代)内線688
発行人　野口定男
毎月十五日発行

出版と印刷
株式会社　表現社
板橋区富士見町三四
電話(九六二)二三九一(代)

新執行部決まる

6.29級委員総会

委員長に堀君（経二）

会計報告めぐり混乱

二年ぶりに法学部（三・四年）では投票が行われ、一定程度の盛り上がりをみせた本年度級委員選挙も六月二五日で終わり、引き続いて二九日、本年度の第一回級委員会総会が開かれた。議題は(1)前年度の決算報告、(2)昭和四二年度新執行部選出の順で進められたが、会計報告では、報告の不完全さ、『組織』の処置をめぐって大混乱になった。次いで行われた新執行部選挙では、新委員長に堀一成君（経二）、また副委員長に川妻千将（経三）、大栗井子（文三）、池田邦樹（経二）伊藤邦雄（経三）の四君（いずれも再建「全学連」支持）が対立候補がないままそれぞれ信認された。

しかし、（T・G）は会計報告は余りに簡単すぎて（ワラ半紙二枚）かつ会計監査も受けていない、従って全く信頼性のおけないものである、と語気強く迫った。時間は午後九時を回っており、時間がないからという理由で議長団から審議を打ち切りの提案があったため荒れぎみだった議場はたちまち混乱状態となった。（全学連）の機関紙「祖国と学問のために」が処置がなされないとの発言があり、議場はますます騒然となった。議長団ならびに執行部から「退場」の声が、いっせいに出た。議長の許可なしの発言は許さないとの再三の警告を無視した飯山君（法三）は退場を命ぜられた。（T・G）の一部も同時に退場しかけたが、もとってきてこの場は一応、収まり次の審議に移っていった。再び、「全学連」機関紙「祖国と学問のために」の、旧執行部の不明確な点について、（T・G）からの追求があった。

それは、独立採算制をとっている「組織」が、級委員会の予算を大分使っている事、その金が、いったい何に使用されたか全く不明確な事なことに対する質問であった。その点については次総会までに、旧執行部が明確に報告する事で一応収まった。

次の議題である、今級委員選挙の総括に移って行った。報告者、選挙管理委員長小林（経四）君から、それに関する報告があった。この時既に一〇時に迫っており審議が一層早められて、今年度新執行部の選挙に移った。立候補したのは、委員長に経済学部三年川妻君、副委員長に経済学部三年川妻君、文学部三年大栗さん、経済学部一年池田君、経済学部二年堀君の、いずれも「全」支派系の五人であった。委員長に立候補した堀君から、「『全学連』の方針として、真に生活擁護勉学条件の改善、民主的な学問の自由、平和を守る、生活をまもってゆく云々」という趣旨の演説があり、他の四人も基本的に支持するという立場を表明した。対立候補がないまま、信認票に移り、対立候補がないまま、信認票に移り、

委員長（定員一名）
当　堀一成（経二）　六四票

副委員長（定員四名）
当　川妻千将（経三）　六七票
〃　大栗井子（文三）　六八〃
〃　池田邦樹（経二）　五七〃
〃　伊藤邦雄（経三）　六三〃

と決定した。

新任の挨拶の後二〇時半閉会。

【解説】

今回の総会をふりかえってみて特徴的に言える事の一つは、近来にないほど出席者が多かったという事である。今までは、定数に満たなかったため委任状で総会が運営されてきたが、今総会は出席者が開会時八九名、閉会時八三名と定足数を出席者が大分上まわっていた。この原因としては、久し振りの法学部の投票が行われたので大分新クラス委員の関心が高まったものと考えられる。

又、総会が非常に荒びいた事。この原因としては、旧執行部の昨年の活動の不完全性から来る数々の欠陥を（T・G）が大いに追求した事が上げられる。しかし討論は不毛な論争にもならない論争に時間を費やされた感が深い。

第三の特徴としては、本質的に「全」支派と（T・G）の理論的対決、と見られるはずであるが、形式上の論争のみが、派手に長時間に渡って両者間に見られたにすぎない。クラス委員会執行部に対する批判が自治会活動に対する取り組む姿勢の次元だけの論争に止まってしまい、「全」支派（＝民青系、（T・G）のヒラより）、（T・G）（＝ボンコツ『都学連』系、「全」支派のヒラより）、というコトバに示されている、思想的次元での対決がなされなかったことが挙げられる。

また、（T・G）は彼らの選挙に向けてのスローガンとして、「形骸化された自治会活動に創造性を」を呼んで登場したのではあるが、執行部選出に当って、立候補しなかった事は、その勝敗は別として、そこにおいてすでに「創造性」なるものを空洞化せしめ、又一見「全」支派の活動を否定しているかに見えるが、質的には、「全」支派の活動そのものの根本的批判になり得ていない。

（T・G）自身が、自らの意図するところにもかかわらず、意に反し、なりつつあるのではないか。

当局、学費値上げを断念か

教職組前書記長が言明

教職員組合前書記長の敷田経済学部教授は、九月一三日開かれクラス委員会総会に教職員組合を代表して冒頭に挨拶したが、この中で、『学校当局は当面、来年度からの授業料値上げを断念した模様である』と重大発言を行った。

本学当局は一昨年一二月に授業料・施設費を文科系で三万円、理科系で四万円の値上げを決定して一年後の今年度は再度値上げするものと一般に予想されており、事実六月に行われた総長会見では松下総長は近年中に値上げをする意向をほのめかしていたものであったが、今度、教職組が、クラス委員会総会という場でこのような発表をしたことによって、当局の値上げに対する当面（来年度）の方針は「値上げしない」方向であることがある程度明らかにされたといえよう。

しかし、本学においては社会学部観光ホテル課程の施設として建設が計画中といわれる「ホテル会館」や、現在問題化しつつある新学部増設（教養・神学・経営の三学部）実現が急速に行われるようになるとすれば、それに伴う校舎増築などが必然化し、たとえ来年度の値上げが見送られたとしても、授業料の値上げが当局の現在的課題になっていることは厳然たる事実であり、本紙編集部では新学部設置の問題とともに今後も追求していく予定である。

級委員会

本年度活動方針決まる

九月一三日の総会で

昭和四一年度のクラス委員会活動方針を決定するための総会が、九月一三日、本館一〇五教室で行われた。会は定刻三時を約三〇分過ぎて、委員定数二六に対し、出席者七〇、委任状三二をもって成立し、ただちに開会された。

開会の言葉と同時に、「若者よ」がクラス委員会副委員長池田君の音唱音頭により斉唱された。これに対し、一部の委員から「ナンセンス」「反対」などの声がかかったが、多くの委員が起立して斉唱した。

当日の議長選出で、小林君（法四）から「執行部の指命を、立候補制にせよ」との緊急提案がなされ、その配名について更に「二名不完全連記制」「一名記入単純多数上位二名にせよ」との三つの意見が出された。少々の混乱があったが、結局「不完全連記」で投票が行われて、法四三名君、理二小池君が選出され、この二君によって、総会が進行された。

議題に入る前に教職員組合書記長、大学院々生会代表からの挨拶があった。その中では「学内共闘」の必要性が訴えられた。その後、クラス委員会副委員長から、本年度『活動方針案』のパンフの朗読があった。その方針の中では特に、学生生活擁護（『方針案』の第三章第一節の勉学条件、生活条件の改善）と、各学部実行委員会の強化（第四章）を特に強調している点が注目された。

次いで討論に入ったが、第一章（情勢分析）では、「今まで獲得してきた『諸要求』を固め次元でとらえるのではなく、当局の『アメとムチ』の二面政策の本質をつかむことが重要だ」（理二委員）という意見が出され、これに対して、「何よりも学生が無関心（要求を出さない）から脱皮する」ことが大切です」（文四委員）と答えられた。また学内民主主義のアイマイさを追求する意見も出た。

第三章（任務方針）では特に生協設立の具体的方針が質問されたが、これに対しては「立教の全学生がやる気になれば今年といわず来年中にも設立できる」という楽観的な意見が述べられた。

九時一五分、一応の討論を終って方針案の採決に入った（出席者六八名、委任状四一名）。

結果は承認賛成五四、反対八、保留四で本年度の方針は原案通り可決された。

引き続いて新執行部に事務が引継がれた六月から九月までの予算の中間報告と、四一年度予算案の報告があり、また前年度執行部の決算報告で不明確だった『祖国と学問のために』の主に会計面での報告があり、いずれも承認された。

最後に本年度の主要な方針である『諸要求実現学部実行委員会』についての補足事項を討議して一〇時二〇分に閉会した。

写真は二〇五番教室における級委員会総会

論説

平和運動

＝現状を越えるものは何か＝

(一)

今年もまた八月六日を中心にして原水禁大会が開かれた。原水禁運動の低迷、そしてもはやそれは終焉したのだとまでいわれている。数年の現状は、外面上の華かさ（例えば一〇〇万人集会など）この一方で、その危機的状況が加速度的に進行しているのだといえよう。プルジョア・キャンペーンによってますます拍車がかけられている〈分裂〉の深化――それはまずなによりも第九回大会での〈部分核停〉の評価、〈いかなる国の核実験にも反対〉・〈平和の敵〉を明らかにせず〈両論の対立（このことはまた国際共産主義運動における中ソの指導者の決定的対立と時を同じくする）の末、原水協から社会党・総評系が脱退して以来、固定化されてきたが――や、運動のマンネリ化によって、運動主体である国民の間に平和運動に対する失望の感が拡大してきているのが現実である。今年の原水禁大会を中心に、原水禁運動、平和運動をめぐる二、三の問題点を検討してみたい。

(二)

前にも述べたが、社党系、日共系の大会が、その分裂状況の克服が叫ばれながらも、依然として分裂した大会を開いたこと、このことは、現代における平和運動が、核兵器という人類を一瞬のうちに撲殺してしまう恐るべき兵器の出現によって、それの完全廃棄、核戦争阻止に向かって全人類的な運動として展開されるという特性を有するという点において明らかにマイナスの役割りを果すであろう。だがしかし、私たちは、平和運動が全人類的運動であることを要求するというところからいたずらに〈原水禁運動の統一〉を叫ぶと（例えば初心にかえれ、など）は現実に対して有効ではないと考える。そして無原則的な組織への統一などはかえって反動的ですらあるのだ。私たちが現在まさに通過しなければならない関門は、現実の、原水禁運動、あるいは平和運動の、その混迷を引きおこした根本的原因をつきとめ、新たな、現実に対して真に有効な反戦平和の闘いを創造していくことにあると考える。

(三)

前にも述べたように、第九回大会において、国際情勢の変化に伴って演じられた原水協内部の分裂は、〈北京オベラ〉〈モスクワの操り人形〉の相互の悪罵の投げ合いに象徴される人類的運動によって実現していくものであっても、核兵器といえども通常兵器と同様に、支配階級の軍事力なのであり、したがって、核兵器の全廃の問題は必然的に軍備の廃止の問題、即ち資本制国家の打倒、権力の止揚による軍事力の全廃の問題として現われてくるをネず反権力闘争、階級闘争の性格を持びてくることを必然とする。だがしかし、それは日共のごとくいうような、平和運動を反帝国主義闘争に高められはしないし、他方、社党のように、完全軍縮、あるいは極東非核武装地帯の設置を政府支配者にお願い〉することによってもまた同様であろう。

平和運動と反帝国主義闘争との関連はまさに現在の国際、国内情勢において現象している危機的情勢の拡大深化過程においてくり出されてくる政治的諸反動攻勢に対して、実践的、具体的に対処していくことのうちにのみ追求され得るであろう。

真の反戦平和運動は、現実の例えば「原潜寄港阻止」を媒介として、またそれと憲法改悪との関連性を明確につかんでいくこと、そのことのうちに、平和運動と反帝国主義闘争との接点を追求していくことを通じてしか、新たな発展の方向はありえないのではないか。

(四)

次に私たちは、〈平和を守ろう〉というスローガンが、その言葉自体の観念的抽象性にもかかわらず、例えばベトナム戦争の一層の拡大化、原潜寄港の恒常化、三次防による軍事力の圧倒的強大化などの〈現実〉によったたかってこのような後ろ向きのスローガンが無力化してしまうことを確認する必要がある。言い換えればそれは、人類共滅の危険性のある核兵器を全廃して平和を築いていくことを今日的特色とした平和運動で、反帝国主義闘争、即ち〈社会の改造〉との関連であるが、現代における平和運動が、特殊的に核兵器の完全廃棄を全面的な意見の対立を通じてしか、新たな発展の方向はありえないのではないか。

秋季六大学野球

本学、連覇なるか

秋季東京六大学野球は九月二〇日より開幕された。三シーズン振りの優勝旗を欠ひさ池袋の町に持ち帰った本学は〝追われる身〟となったが〝勝って兜を締めよ〟を教訓として増々戦力を強化してきたと思われるが、ここで今季の本学の戦力を探ってみよう。まず恵観的材料として、六大学野球史上二人目という二冠王を獲得した稲田投手の久場である。稲田は急性肝炎で無理をおしてなら、一ケ月で出場可能かもしれぬが、今季の出場はちょっと無理ということだ。この稲田投手の久場を早大のエース八木沢投手は次のように話している。「稲田がいなければ、一〇の力を七の力でやれる」この談話を聞いても、稲田の力は押して知るべしである。この大きな穴をうめるためには、秋山、野之山の必要である。

いずれにもしても稲田欠場の穴を如何に克服して戦っていくかが大いに注目され、その克服いかんで春秋連覇も決して夢ではないだろう。

先ず東大に連勝

◎第一回戦（九月二〇日）
本学8―東大
若月、中田・伊藤、田中
本塁打小川、三塁打瀬尾、野之山

◎第二回戦（同一一日）
本学11―東大
石川、吉川・野津―伊藤、田中
本塁打松田（二）野之山
三塁打小川
（この結果本学は勝点一）

軟式テニス　全日本準優勝

八月二〇日から三日迄、小田原市営城山コートで、全日本軟式庭球選手権が、天皇杯をかけて行われた。本学軟式庭球部も出場し、西山・中島組は三回戦まで進んだ。四年生の亀田・長納のコンビは順調に勝ち進んだが、惜敗にておしくも敗れ、準優勝した。

対中大定期戦　弓道部

本学弓道部は九月一一日恒例定期戦において中央大学と対戦した。先攻中大、後攻本学で試合は始められ、本学は二四対二二六の圧倒的勝利をおさめた。

第三回ティーチイン開かる

第三回、ベトナム反戦ティーチインが、九月一六日（金）午後三時より三五二番教室において開催された。講師の小川信雄理学部教授より、核問題を中心に国際問題に関して報告がなされ、討論に入った。神島二郎法学部教授の戦争体験などを中心に熱心な質疑討論が交され、八時頃、閉会となった。第四回ティーチインは来月中旬開催の予定。

第9回　新聞学会賞

募集

立教大学新聞学会は例年の通り懸賞小説募集を左記の要領で行います。多数の応募を期待いたします。

＝募集要項＝

一、字数　四〇〇字詰原稿用紙二〇枚前後
一、資格　大学学生（含、大学院学生）
一、締切　昭和四十一年九月三〇日
一、発表　▼商業誌未発表の作品に限る
▼版権は本学会に所属する
一、選考委員　小田切進・小松伸六・磯田信二・野口定男・福田宏年（敬称略・順不同）
一、賞金　一等一篇一万円佳作数篇一千円
▼ペンネームの使用は自由、但し本名所属学部学年・住所住居のこと

懸賞

立教大学新聞学会賞

〔訂正〕

本紙二四六号の一面の級委員選挙関係の報道記事中、開票結果の次点吉沢敏君は（「全」派）ではなく（T・G）でしたので訂正いたします。

〔二面よりつづく〕

（？）することを唯一の目的としたような画一的なストーリー主義（第三芸術論）を持ち出してきたところで仕方あるまい。〈カタルシス芸術の否定〉から、〈後進国の前衛性〉、〈アヴァンギャルドから記録芸術へ〉と果敢にアプローチを繰り広げていく過程で、一体、私たちは映画という〈創造〉の場から何を得たら、芸術的自立の方向を見出すことが可能になるのだろうか。

喜劇『愛のレッスン』への花むけとして、

人生は誰かが死んだからといって喜劇であることを止めないまた誰かが笑ったからといって悲劇であることを止めない。

―バーナード・ショー―（鷹）

〈訂正〉

本紙二四六号の一面の級委員選挙関係の報道記事中、開票結果の次点吉沢敏君は（「全」派）ではなく（T・G）でしたので訂正いたします。

〔二面よりつづく〕

映画が意識的遊戯と商業主義の共同産物であったならば、今更〈第三芸術論〉を持ち出してきたところで仕方あるまい。〈カタルシス芸術の否定〉から、〈後進国の前衛性〉、〈アヴァンギャルドから記録芸術へ〉と果敢にアプローチを繰り広げていく過程で、一体、私たちは映画という〈創造〉の場から何を得たら、芸術的自立の方向を見出すことが可能になるのだろうか。

喜劇『愛のレッスン』への花むけとして、

人生は誰かが死んだからといって喜劇であることを止めないまた誰かが笑ったからといって悲劇であることを止めない。

―バーナード・ショー―（鷹）

日本の夜と霧
大島渚作品集
●最新刊
〈増補版〉580円
映像芸術の第一人者がシナリオ、TVドラマ、ドキュメンタリーなど主要作品を網羅し苦闘の足跡を明確な方法意識で総括した解説を付す。収録作品＝愛と希望の街／青春残酷物語／太陽の墓場／日本の夜と霧／深海魚群／青春の深き淵より叫び／忘れられた皇軍／ユンボギの日記

埴谷雄高　<5版>500円
虚空
未完の長篇『死霊』への断章ともいうべき短篇小説5篇を集大成した作品集■解説＝吉本隆明

スペインの革命と反革命
フェリックス・モロウ／山内明訳　1200円
革命的マルクス主場の立場から1936～37年におけるスペインの全政治過程を綿密に分析し、7月19日の革命とバルセロナの5月事件を二つの焦点とする体制と反体制のダイナミクスを生き生きと描いた大著を初めて完訳する。巻末に革命への前史を扱った『スペインの内戦』を付載

G・オウエル／鈴木・山内訳　600円
カタロニア讃歌
社会主義の小宇宙をもとめて民衆とともに戦ったオウエルが作家の鋭い眼でとらえたスペイン革命ドキュメント<4版>

トロツキー選集③／清水幾太郎訳　700円
スペイン革命と人民戦線
■1930年代スペインの鋭い分析<2版>

現代思潮社　東京都文京区春日1―6　振替・東京72442番

吉田精一・森本治吉編著
日本文学入門
A5美装　定価六八〇円

高橋健二・吉田精一編著
世界文学入門
A5美装　定価七二〇円

稲生典太郎著　A5上製　定価八二〇円
日本外交思想史論考
―条約改正論の展開―

武田信一監修　一・奥山次良共著
水野
西洋哲学の歩み
定価　580円

鬼頭英一・鈴木三郎編著
現代哲学の流れ
定価　780円

D・E・トウィディ著・武田　健訳
フランクルの心理学
定価　580円

東京都豊島区雑司谷町1の375（株）小峯書店
千代田区神田駿河台2の1の3　TEL　294―6915　小峯書店編集部

日本図書館協会選定図書〈松竹映画化決定〉
七歳の捕虜
全マスコミが絶賛した人間愛の記録　光俊明著
四五〇円

青春のエネルギーと知恵で〝明日の国ブラジル〟に体当り！
アデウスにっぽん
☆★若さとバカさの挑戦★☆
B6判・286頁・430円〒70円
狭い日本で〝規格部品的〟人生を送るのは、まっぴらごめん。若者を締め出す社会には、こっちから〝アデウス！〟アマゾンへの往復ヒッチハイクで、明日の国ブラジルの可能性は十分にわかった。二人の現役学生（玉川大学農学部）のクーデター的冒険旅行の記録
大槻洋志郎
本間久靖　共著

東京神田駿河台1～2中正ビル　本田書房　電(294)3618～9　振替東京62493

責任編集　冨山・三浦・森・山口
和独辞典
「かな」引き・例解式・語法本位、豊富な見出しと文例からなる現代のドイツ語・ドイツ文がすぐに引き出せる。
ビニール装800　革装1200　〒70

成瀬清・佐藤通次著　¥450〒45
小独和辞典

藤田五郎著　¥680〒70
新ドイツ語講話
広文典としても利用できる

橋本文夫著　¥600〒70
ドイツ語の輪郭
知らず知らずに実力がつく

常木実著　¥420〒70
入門ドイツ語
初級から中級へ

大学ドイツ語講座
相良守峯博士監修　全六巻
Ⅰ前期篇　Ⅱ後期篇　Ⅲ文科篇　Ⅳ理科篇　Ⅴ医科篇　Ⅵ生活篇
各¥600　〒70

橋本文夫著全三巻各¥300〒50
橋本ドイツ語講座

日本独文学会編　¥200〒45
重要動詞とその用例

ドイツ語の基礎　橋本文夫著　¥200〒70
ドイツ文法の知識　阿部謹隆著　¥200〒50
わかりやすいドイツ語　青木一郎著　¥200〒70
覚え易い表解ドイツ文法　青木一郎著　¥200〒70
一目でわかるドイツ語変化表　青木一郎著　¥200〒50
ドイツ単語五五〇〇　大塩信太郎著　¥200〒50
ドイツ単語二〇〇〇四〇〇〇　藤本直秀編　¥200〒45
ドイツ語基礎単語熟語　常木実著　¥200〒50
接続法―その理論と応用―　岡島孝一著　¥200〒70
ドイツ語話し方―その基本―　植田敏郎著　¥200〒50
ドイツ語会話35章　三好郁三郎著　¥200〒70
独英対照文法　阿部謹隆著　¥200〒70
独文解釈の研究　阿部謹隆著　¥200〒70
独文解釈の演習　小栗清著　¥200〒50
ドイツ文の構造　武田・田中共著　¥200〒70
ドイツ語の鍵　郁文堂編　¥200〒50
現代独作文　仁科ミューラー著　¥200〒70

申込次第目録(内容見本)呈　ドイツ語専門書出版　郁文堂出版　東京都文京区東大正門前　振替東京14981番

日経　日本経済新聞

一つの演劇論

■民芸公演
「ゴドーを待ちながら」

△芸術の不毛性▽という厳しい意識は、いまだわれわれの意識的世界の一つの主流を占めている。この観念は演劇に対しても決定的なものなのである。われわれは芸術の創造性を追求していく過程で、一体何をその媒体として捉えていけば良いのだろうか。アンチ・テアトルと称するものの有効性が、この疑問に一つの解答を示してくれるものであることを期待する。

本紙では劇作家別役実氏に、アンチ・テアトルを本質的部分にまで掘り下げたエッセイを依頼した。

――学芸部――

芝居の具体性について
アンチ・テアトルの有効性

別役実

新劇はコントンとしている。次第に分りにくくなってきている。これは良い事だ。

反対に、映画は何とも分り易くなってきた。どうしてこう単純なのかと思われるくらいだ。あがいても、取り澄ましても、居直ってもう映画はどうしようもない。映画の単純さはストリップに似ている。具体的であろうとすればするほど白々しいし、かと云って白々しくする事では決してサラザラした具体性となってはね返って来ない。一方交通なのだ。

ストリップの最後と云うのは、ハラリとバタフライが落ちる瞬間の事で、ハッと思った時は、別のものがそれをおおっている。ストリップはそれ以上でも以下でもいけない。お客とストリップ嬢との関係に於ては、それがトコトンと云うものだ。

映画の具体性とその限界についても同じ事が云える。最近は「ザラザラした画面」を作るために、しきりに極端なクローズアップが使われる。確かに、カメラが次第に近付いて、毛穴の一つ一つがハッキリ見えてくる過程と云うのはストリップが一枚一枚脱いでゆく作業に似て正倒的である。しかし、それがある限界を過ぎた瞬間私達は単なる光、もしくはフィルムの前に茫然と立たされる。

「憂国」と云う映画があった。あれは三島由紀夫が腹の毛をかきわけて、ナイフをブツリとやるまでの映画であって、それ以上のものはあってはいけなかった。腹の中から大腸小腸がバラリと出て来るに及んでは、もういけなかったストリップ嬢が例のあそこにバナナを突込んでみせるのと同じで、それまでに、若しかしたら構築されたであろうものを、無惨にも打ち壊している映画もストリップも打壊された所から再び逆の方向へ、構築され始める可能性は全くない。

年期の入ったストリッパーが客との関係に於て、或る空間を構築してゆく作業は見ものだ。有能な芸は快して変な媚をふりまいたり下手飾りを弄せたりはしない。もの凄い目付で客をジロジロ舐めながら面倒臭そうに一枚一枚脱いでゆくだけである。順序正しく脱いでゆき、順序正しく脱いでゆき、あるものが形成されてゆく。オイデプースの様に明解で、且つ格調高い作業である。

しかし、若しそれが、芝居に於ける具体化の作業と同質のものと考えたら間違いである。ストリップ小屋に於ける女の体は、どんなに凝縮された部分を取っても、それは具体的ではない。客の目とそれとの間には、奇妙に屈折した空間があり、その空間の同意の上にあるものは構築されるのであるからだ。云うならば、ストリップ小屋の中の客とストリッパーとの間で、若し何かが構築され得るとしたら、若にそれは或る錯覚のうえにでしかない。映画も同様である。

ひところ、映画は芝居よりも具体的であるかの様であった。それは、事実と云うものは作られたものよりも具体的であると云う一般通念が逆手に利用されていたにすぎない。スローモーション、ストップモーション、極端なクローズアップ、粒子の荒い画面、最近になって、そうした手法が争って使われ始めたのは、これまでの映画の具体性への誤解と、そこから抜け出そうとする悪あがきを良く物語っている。映画の画面と客も、ストリッパーと客との間にある屈折した空間を隔てしか直接的であり得ない。映画が自分の錯覚を利用している。という事実は、何度もくり返し云われてはいるが、致命的な事である。

映画とストリップが、或る錯覚の上に何物かを構築する芸術だとすれば、その錯覚を取り去る事は何も意味しない。三島由紀夫の腹の中から大腸小腸が出てきた瞬間全てが打壊されたのはそのためである。勿論あれが三島由紀夫の本モノだったら一寸したものだったかもしれない。お客と云うものは豚の毛を使ったのかしら、牛のかしら、などとしか考えないに違いないから……。

ともかくも具体性と云うものは錯覚にもとずかないものであり、錯覚に裏打ちされなければ具体的であり得ないと云うのは論理的にはない。

観客を前にして、素人がシラフで何の設定もなく、指令もなく立ちつづける事は出来ない。どちらかと云えば、可哀そうなおじいさんとか、惨禁な高利貸のデブを演ずる方がたやすいのである。これは舞台に「在る」と云う事が、精妙な演技に基づ創造性を持続的に如何に要請されるものであるかを良く教えてくれる。何かの役を演じていた方がたやすいと云うのは現在云われる演ずると云う事が、「在る」ことからの逃避の方向へ向いている事を如実に物語っている。云うまでもなく、舞台上に「在る」と云う事は、「在りつづける」と云う事であり、自分と客との関係を、絶え間なく正確に構築しつづけると云う事である。自分と客との関係は、時間の推移と共に常に変転し流動するものであるから、「在る」と云う事は、キルケゴールの「不安」の様に、一度した状態がそのまま続くのではなく、瞬間々々に於て常に「在りつづける」事なのである。

流れると云う事は、「在る」ことからの逃避の手段でなく、「在る」ことを壊されない様に、その上にソッと構築されるべき事なのである。

しかし、「在る」と云う事は如何にして可能なのであるか。現在「在る」と云う事は、特に「働きかける」と云う事を意味しない。むしろ「置く」と云う事は、常に一つの関係の上でしか測られない。役者とは、劇中の人物との関係に於て存在する。劇中の人物とは、観客の錯覚の結晶である。従って役者は、観客の錯覚を覚ます方向へ、つまり劇中の人物たる事を拒否する方向へ自分を関係づける事によって「在る」事が出来るのである。アンチテアトルはその様にして有効である。

現在、芝居が次第に分りにくくなってきているのは、「在る」と云う事を「働きかける」事でなくては説明できない状態が一部に残されており、役者の拒否が、「拒否の関係に立つ」と云う事で行われず、「拒否の態度を表明する」という事に、終っているからである。

芝居は、映画とストリップが終った瞬間から始まる。始まるのではあるけれども、それは始まって何かが果されて、終る、のではなく、先ず、一つの関係が構築されそれが常時正確を保ちながら持続するのである。だから、映画とストリップが始めから終る事を予定しているのに対して、芝居はそのままでは終りようがない。正確な芝居は、終らすためには制限時間が必要である。

芝居に於ける構築の作業と云うのが、映画やストリップの様な、或る既存のルール、或る不確定なものを必要とせず、むしろ、それを打壊したところから始まる点で、一つの具体性を持ち得る可能性を感じさせるのである。

（筆者べつやくみのる氏は、劇作家）

改憲への視点―1―

明治憲法の成立過程
その歴史的背景をめぐって

政府ブルジョアジーの、日本国憲法発布直後以来の政治的課題である憲法改悪は法規的にはブルジョア学者の組織する選挙制度審議会で小選挙区比例代表制を案出することにより、また種々のイデオロギー攻勢により遂行実現されようとしている。我々は有効な阻止闘争を展開するためには学的な現状分析により改憲の意図と背景を見抜く必要がある。またこの改憲問題を検討する時、我々を帝国主義戦争に突入させた戦前の国家体制である大皇帝国憲法を発布されたのかを追求することは不可欠ではなかろうか。このような改憲問題に対するアプローチの段階として、まずわが国最初のブルジョア的要素をもつ明治憲法の成立期の考察を試みた。

江戸時代の末期には次のような諸矛盾が発生していた。生産手段である土地の封建的領有による剰余生産物は、国内市場の拡大化に伴って商品化した。そのため生産者である農民に対して圧迫、搾取が強化された。またこの国内市場の拡大によって成長してきた地主、商人、問屋制資本家層は、一面では、領主から保護され、農民・手工業者を封建的に搾取し領主と利害を共通にすると同時に、他面では彼ら自身も領主に搾取され圧迫された。また下級武士の生活は困窮を極めた。

封建日本の内部危機がこまで進行しているとき、欧米資本主義の強烈な圧迫が、全支配階級と国民に加えられた。当時すでに欧米諸国は産業革命を遂行して資本主義を確立しており、アジアの大部分の封建社会は、彼らの植民地にされた。北方からはロシアが南下してきた。日本はこにおいて西欧の衝撃に直面せざるを得なかった。このため日本は自らを積極的に資本主義化することが可能か、さもなければ他のアジア諸国と同様の運命になるかの分岐点に立たされたのである。日本を欧米諸国の半植民地的市場とするために、大砲の脅迫によって通商条約が締結された。

このため倒幕派においては植民地化に対する全人民の祖国防衛の闘争を展開しはじめた。しかし彼らは新しい経済関係に積極的に適応した資産階級的革命を遂行しようとする方向性を示した五ケ条の誓文における「公議輿論」の尊重も国民大衆の世論のことではなく、官史と公卿、士名、藩士らの政府に結集しようとするものである。

明治政府は一八七一年、「御親兵」を鎮圧用武力として廃藩置県を断行した。これによって単一不可分の統一国家がうちたてられた。

廃藩置県に成功した天皇政権は次々にその支配体制を整備した。中央官制の大改革を施行し、その中枢部は薩摩と長州の出身者が独占し、いわゆる藩閥専制政治が実現された。

この義務教育は、天皇制絶対主義の精神的支柱をつくることを目的とすることが容易に判断できる。

明治政府は官僚制の整備、常備軍の建設、資本主義の育成、そのほか絶対主義支配体制と軍国主義のための支出は増大し、各地不統一の物納年貢を各地統一の金納に変更する必要性に迫られていた。しかし、この地租改正は封建経済から資本主義へ平民と下級士族が資本主義の必要とする労働者として搾取される「自由」を得たこと、全国民が天皇制の画一的な支配に服従させられるということである。しかしどんな専制権力も、人民を権力や暴力で抑圧するだけでは不十分で、思想的にも人民を支配する必要性がある。一八七九年の教育令で、教育は中央集権によって画一的に統制されることになり、また同年天皇の名で「教学大旨」が出され、儒教道徳をふまえたものが教育の中心任務とされた。

この義務教育は、天皇制絶対主義の精神的支柱をつくることを目的とすることが容易に判断できる。

明治政府は官僚制の整備、常備軍の建設、資本主義の育成、そのほか絶対主義支配体制と軍国主義のための支出は増大し、各地不統一の物納年貢を各地統一の金納に変更する必要性に迫られていた。しかし、この地租改正は封建経済から資本主義へ

極的に適応し富国強兵に対するのではなく、それを利用すること を知りはじめ、外国からも彼らを弾圧する幕府を共通の第一の敵とした。

さて倒幕派によって樹立した明治政府は対内的には天皇を中核とする中央集権化、対外的には和親貿易を積極的に促進せる方向性を示した五ケ条の誓文における「公議輿論」の尊重も国民大衆の世論のことではなく、官史と公卿、士名、藩士らの政府に結集しようとするものである。

明治政府は一八七一年、「御親兵」を鎮圧用武力として廃藩置県を断行した。これによって単一不可分の統一国家がうちたてられた。

廃藩置県に成功した天皇政権は次々にその支配体制を整備した。中央官制の大改革を施行し、その中枢部は薩摩と長州の出身者が独占し、いわゆる藩閥専制政治が実現された。

この義務教育は、天皇制絶対主義の精神的支柱をつくることを目的とすることが容易に判断できる。

明治政府は官僚制の整備、常備軍の建設、資本主義の育成、そのほか絶対主義支配体制と軍国主義のための支出は増大し、各地不統一の物納年貢を各地統一の金納に変更する必要性に迫られていた。しかし、この地租改正は封建経済から資本主義へ

ナンセンス劇への埋没

映画を語る
イングマール・ベルイマン監督
「愛のレッスン」

片足を自己陶酔の意識的な泥濘の内に踏み込んでしまっているとはいえ、なお、思索的なアリズムの世界に踏み留まって、△無償の行為▽めいたもので、不条理の状況への問いかけを、常々と為し続けてきたはずのイングマール・ベルイマンが、そのユニークともいえる形而上的な観念の世界から自らの意識を置換させてしまうと云う、一つの決定的（と思われる）な行為を可能ならしめたならば、もはや、ベルイマン映画といわれるものの正体は、何らの有効性を持つことなく、はるかかなたにあってしかるべき不毛の世界へと直進する以外には、存在性を見失うことになるだろう。――もっとも前方に不毛の風景を見つけて辟易とさせられる、というむしろたまらない空虚さを感じさせられるのはベルイマンに限ったことでなく、それは現在或いはここ数年、映画が絶対に信じ得ないでいる分厚い壁のなすところであるが――

神々はシジフォスに、休みなく岩を山の頂上まで転がして運び上げる刑罰を課した。山の頂上に達すると、石はそれ自身の重さで再び落ちて来るのであった。

カミュの極めて印象的な△不条理の論理▽を思い浮べるとき、△無償の行為▽の創造的な自立性を認識し、状況にむけられる唯一のプロテストの可能性を理解するのである。この微妙な一つの図式の内で人間関係の疎外性を訴えることはすでに今日的な命題から逸脱してしまっているのだろうか？

乾燥し切った現実と、空洞化した巨巨の内的意識との掲棄関係といったものは、△不条理の論理▽と対極的に位置づけられるものは決してあるまい。これ以上、信条主義（？）に陥っていることはそう。

イングマール・ベルイマン監督の『愛のレッスン』は、『不良少女モニカ』・『道化師の夜』などの間に発表された"喜劇"と云われる作品である。フアース（一幕ものの喜劇）による愛の探求と云う基本的スタイルをもってこの映画に展開されるのであるが、端的に云って、ストーリー主義に溺れた本質喪失になりさがっていると の感が深い。もし、ストーリー主義から脱皮することによって、その現実性ある枠から開放されたならば、日常的な茶番からも今日的主題の発露が見られるはずなのだが、現在と過去、過去と現在と云った時間的な絡み合いを、巧妙に複雑化させながら、現在のシチュエーションの拠り所を、過去のシチュエーションにおくことに成功

（一面へつづく）

●学校新聞・業界新聞・組合機関紙　●オフセット印刷

東京新宿山吹町 260～8201代表　滝沢新聞印刷

史上空前のスケールと最大のアクションで描く3時間の感動！

天地創造 70mm 総天然色 THE BIBLE ...in the beginning

■監督ジョン・ヒューストン
■ピーター・オトゥール　■エバ・ガードナー
■マイケル・パークス　■ウラ・ベルグリッド

平日 11:30 3:00 6:30　日祭 9:00 12:10 3:30 6:50

10月8日より ロードショウ　渋谷 パンテオン　東急文化会館1階 (401) 7219

若さとファイト
フレッシュな時代感覚
そして
豊かな創造力と知性をもった
あなたのような人こそ
世界の企業"オリベッティ"の
明日の発展に必要です

応募資格
昭和42年3月　大学、大学院卒業予定者で事務改善に関心を持ち、エネルギッシュでフロンティア精神旺盛な男子。

営業部員
(1)計算機タイプライター営業部員は法・経・文その他の学部専攻のもの
(2)会計機、I・D・P営業部員は会計学、簿記学専攻のこと
(3)システムズエンジニア、プログラマー担当部員は管理工学、経営学、数学専攻のこと

事務系社員
大学・大学院で会計、経理、経営、人事労務管理を専攻のこと、特に大学院に於て秀れた学問的な研究業績を持つものは規定以上の待遇をします。

待遇
●初任給　大学卒28,000円
大学院卒31,000円
（別に諸手当あり）
給与および福利厚生など、社員の生活全般に関する待遇・保証については、日本でも一流の水準にあり、年二回の昇給、年二回の賞与の他社会保険制度完備し、福利厚生活動を積極的に進めています。
●「メリット・システム」を採用していますので給与も職責も実力主義でダイナミックに昇進します。

応募要領
●応募ご希望の方は、大学就職部を通して人事選考課宛応募書類をお送り下さい。
●詳細は、大学就職部、又は人事選考課までお問い合わせ下さい。

日本オリベッティ株式会社
人事部人事選考課
東京都目黒区碑文谷1－26－17　TEL(714)-1211代表

ヨーロッパ最大の事務機メーカー・世界最大の計算機メーカー
olivetti

日本オリベッティは1961年設立。わずか5年後の今日、全国に6支社、5出張所、120の代理店、約700の特約店を持つにいたりました。この強力な販売組織と完ぺきな技術サービスは、オリベッティのタイプライター、加算機、計算機、会計機を、早くも日本全国の企業に、欠かすことのできないものにしました。事務の合理化、能率の向上――日本の経済界がかかえているこの課題を解決するために、日本の事務機械市場はもっと多くのもっと高度のオリベッティ製品を待っています。この期待に応えるため、私たちは優秀な人材を導入して、営業陣容をいっそう拡充することになりました。とくに、今後、早急な開発の必要に迫まられているIDP（情報の集中処理）の分野へは、画期的な進出を企だて、ソフトウエア、すなわち機械のもつ基本的能力を最大限に発揮させるプログラムやシステム全体の開発充実にポイントをおくことになりました。これに関連して、高度事務機械の導入や組み合わせ、あるいは問題処理に関しての企業アドバイザー、すなわちシステムズ・エンジニアの活躍分野が大きくクローズアップしてきました。
このような新しい分野を開拓する、若く進取の気性に富んだ人物を、さらに短期のトレーニングと実地教育により、責任ある地位につく自信と気力にあふれた人物を私たちは待っています。

明春卒業されるみなさまへ
躍進する《マツダ》は若い力を求めています

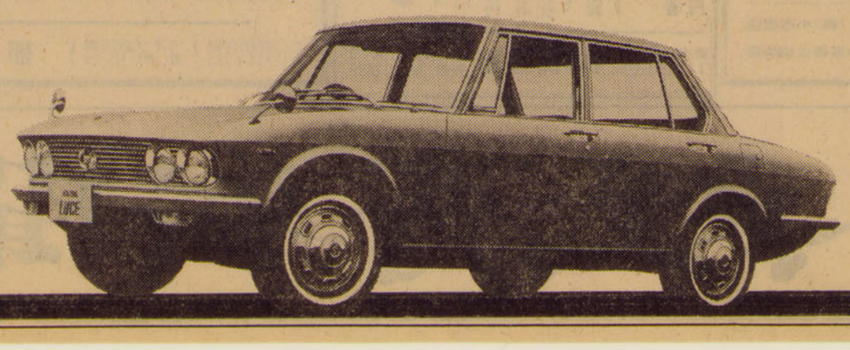
マツダはわが国自動車界のビッグスリーの一つです　現在月産約3万台！　好評のファミリアシリーズについで　1500ccの常識を破った6人乗り乗用車"ルーチェ"の新発売―そしてさらに世界が注目するロータリーエンジン車の開発実用化へ…とたゆみない前進をつづけています

マツダデーラー（特約販売会社）77社はこのマツダが自信をもって生産するすぐれた製品の各都道府県下の販売を一手にひきうける会社です

いまマツダデーラーではますます発展を予想される日本のモータリーゼーションのために今後のマツダを背おう優秀な人材を求めていますマツダはあなたに大きい期待をよせているのです

マツダデーラーへの就職申し込みは下記にお問合せください
貴校就職課又は
東洋工業(株)・東京支社販売部総括課
TEL(272)6261　所在地・東京都中央区日本橋江戸橋3－6

マツダデーラーは　原則として1県に乗用車系デーラー1社　商業車系デーラー1社づつ設置され　メーカー東洋工業と一対となって　マツダ・グループとしての強い結束力を誇っています



全国マツダ販売会社
（全国マツダ会）